

ポスター報告 6

相良 真央 特定非営利活動法人凸凹ライフデザイン

#報告題目 青年・成人期の発達障害者の<凸凹>を組み合わせる意義と困難—当事者会からの考察—

#報告キーワード 発達障害 当事者会 当事者活動

#報告要旨

○報告趣旨

発達障害者同士の<凸凹>（個々人の能力の凸凹、できる部分とできない部分。発達障害者は能力の凸凹が定型発達者より大きいとされる）を組み合わせることで、発達障害者らの苦手な部分を相互に補完したり、より高いレベルの物事を成し遂げたりしようとする試みが見られる。しかし、報告者らの発達障害当事者会での経験から、それらがいかに困難で場合によってはリスクの高いものであることを認識する必要性を示したいと考える。その上で、凸凹の組み合わせを試みることの意義と、必要と考えられる工夫や配慮の要点を示し、発達障害者らのより安定した能力発揮が可能な生活に資したい。

○凸凹の組み合わせの定義

1. 発達障害者同士の能力の組み合わせは何を目的としているのか確認する。

当事者 A の「できる」部分と当事者 B の「できない」部分をあわせるとは、他の定型発達者と同等の成果を求めるものか、それ以上の成果を目標としているのか。または、質の違うものを期待する取り組みであるか。事例、他団体等の理念から問い直す。

2. 組み合わせが「想像より」困難な理由を考える。

ジグソーパズルの図は「それぞれ形は違うがどれも欠けてはならない存在」を示すが、視覚的にはそれぞれがかみ合うように見える。（目に見えない障害がある部分で理解されにくいように、我々は目で見たようにまず理解してしまう。）しかし、実際は発達障害者に共通する部分があると考えられる。例えば、当事者会では「怒りのコントロール」「コミュニケーション」「こだわり」等繰り返されるテーマがある。これらの例から、例えば多くの発達障害者が怒りのコントロールが苦手であると理解できるので、その部分の組み合わせは困難であり、別のもので補わねばならない。

3. なぜ凸凹の組み合わせの試みが起こるのかを考える。

これは当事者主体の試みと、親の会や医療、福祉主体の取組ではその目的が異なるのではないか。また、特に当事者主体の場合、ある劣等感から「人よりできる」を強調し過ぎてしまうリスクを取り上げたい。

○組み合わせに必要な工夫

1. 当事者会

発達障害当事者会は一つの組み合わせの体現と考えられる。仲間の存在を知る効果は、歴史の古い自助会からも理解できる。発達障害者は特に、理解と納得の確認が重要な場合があり、会の意味、また発達障害者同士の凸凹を組み合わせる意味の理解と納得をその試みに関わる全員で確認することが、リスク回避とより良い成果に結びつくと考えられる。

2. 第三者の存在

特に組み合わせ時の衝突を緩和するために、仲介者・通訳者の存在がポイントになる場合がある。しかし、その作業は非常な労力を要することも多く、仕事の枠組み以外で引き受ける者は非常に少ないと思われる。職業となると、現状仕事となり得る事のほとんどが定型発達者／健常者視点であり、その役割を担う者によって、組み合わせが定型的になる可能性が高い。発達障害者で支援職の者、支援職を志す者も増えているが、支援を職業にするとはい現在のところ基本的に多数派的な理論の元で働くことであり、当事者性の優先が難しいか、又は大なり小なり優先させる葛藤を抱えると考えられる。

○おわりに・凸凹の組み合わせで可能になること

少数派が多数派的な動きをする、多数派に訴える時には数（と権威）が必要になる場合が多い。数が必要な活動、当事者運動等は凸凹の組み合わせが生きる分野であると思われる。しかし、結局のところ凸凹の組み合わせの可能性を考え行動する時には、「何か、おもしろいこと」が起こるかもしれないという期待に基づいている。それらの事例が集まり、更に事例に基づかないおもしろいことを起こす新しい組み合わせを希求しつつ、我々はそれらの安全な土台づくりを考えていきたい。

*本報告に関する研究のための調査等を行うに当たり、各研究倫理指針を参照し、個人情報の取扱等に細心の注意を払った。